
第26回 日本福祉大学知多半島総合研究所歴史・民俗部研究集会
「近世常滑焼を考える」報告

2012年11月10日に開催した第25回の研究集会では、中世の渥美・常滑焼についてのシンポジウムを行いました。

第26回は、研究蓄積の薄い近世の常滑焼について、その生産から消費までを歴史学と考古学の両面から検討しました。発表内容を特集として報告いたします。

◇開催日時 2013年11月9日(土) 10:00～16:00

◇場所 日本福祉大学半田キャンパス 101 講義室

◇内容 研究報告①

「近世常滑窯の真焼甕類について」

小栗 康寛 氏 (愛知県常滑市教育委員会)

研究報告②

「近世常滑焼の生産と流通」

高部 淑子 (日本福祉大学知多半島総合研究所 教授)

講演

「近世考古学と近世史研究」

岩淵 令治 氏 (学習院女子大学国際文化交流学部 教授)

シンポジウム

「近世常滑焼を考える」

コーディネーター 曲田 浩和 (日本福祉大学経済学部 教授)

知多半島総合研究所歴史・民俗部 部長)

パネリスト 上記報告者・講演者 3名

中野 晴久 氏 (とこなめ陶の森 資料館 学芸員)

◇主催 日本福祉大学知多半島総合研究所

※組織名・肩書きはシンポジウム当時のもの。

近世常滑窯の真焼甕類について

愛知県常滑市教育委員会、とこなめ陶の森 資料館 学芸員 小栗 康寛

はじめに

「近世常滑焼」は、1822年（文政5年）に完成した樋口好古の『尾張徇行記』に「北条瀬木常滑ノ三村ヨリ出ス甕ヲ総テ常滑焼ト称ス」と記載がみられる⁽¹⁾。当該期の常滑窯は、発掘調査の事例がなく、生産遺跡である窯そのものが遺存していない可能性が高く、考古学的調査がまったく行われていないのが現状である⁽²⁾。つまり、当該期の研究は古記録や伝承、美術品等の現在まで伝わる伝世資料等を中心に展開されてきたため、近世文書の発見や消費地遺跡の発掘調査に左右されてきたといえる⁽³⁾。

近年の文献学の成果は、常滑北条村の廻船業者であった瀧田金左衛門家文書から、生産地と江戸、生産地と環伊勢湾地域の2つの流通パターンが存在し、取引される「近世常滑焼」がそれぞれ異なっていたことが明らかとなった⁽⁴⁾。さらに、江戸市場へと供給された「近世常滑焼」は京焼や信楽焼と同程度の流通があり、幕末期になると急須や土瓶、徳利といった小細工物が大量に消費されたことが明らかとなっている（高部2012）。

一方、考古学の成果は、環伊勢湾地域の消費地の一つである名古屋城三の丸遺跡や清洲城下町遺跡、豊橋市吉田城址などが発掘調査され、壺・甕類や井戸筒とともに竈、蚊遣、土樋、火鉢など様々な器種が出土している。特に目覚ましい成果を挙げているのは、大消費地であった江戸遺跡である。東京都台東区、新宿区、千代田区、港区を中心に墓地跡や藩邸が発掘調査されており、多量の常滑窯製品が出土している⁽⁵⁾。江戸遺跡出土資料の大半は、遺体を納めて埋葬する甕棺墓で、武家を中心に流行した埋葬方法の一つである。これらの豊富な資料は、従来の編年の再検討を可能とし、2012年に刊行された『愛知県史 中世・近世常滑系 窯業3』で一つの到達点を迎えた。（図1）

とはいえ、文献学に従って考古学研究が進む中で、異なった情報が増加している点にも注意を払わねばならない。つまり、昨今の文献史料及び考古資料を概観すると、「近世常滑焼」が江戸市場へ大量に供給されていたにもかかわらず、遺跡からは壺・甕類以外の出土量が他の生産地と比較して非常に少ない状況が指摘されているのである。これは墓地という遺跡の性格を考慮しても説明できるものではない。さらに甕類の名称は口径や胴部の形状、法量の違いによって認識されていたと考えられるが、文献史料では判然としない。

以上の問題意識のもと、本論では文献史料からも検証が可能である19世紀初頭から幕末にかけて生産された真焼甕類に注目する。それは消費地遺跡である江戸で大量に出土する「近世常滑焼」は真焼甕類のみであり、編年研究の対象とされる型式学的な検討が先行されてきた状況がある。以下では、消費地遺跡で出土した真焼甕類の考古学的研究を基軸としながら、文献学の成果を援用して「近世常滑焼」の新たな理解を深めていくことにしたい。

1 近世常滑焼の窯と生産品

近世常滑窯の発掘調査は行われていないが、絵図や文献史料が存在しており、窯の所在や窯場の数など少なからず情報を得ることができる。北条、瀬木、常滑の三ヶ村の窯の分布は、元禄期が北条村4立、瀬木村1立、常滑村（奥条）1立（1立は窯2基を指す単位）となっている。その後、瀬木村と常滑村の記録はないが、北条村は享保期10基、天明期8基、天保期11基と窯の推移が記録されている。

1819年（文政2年）に描かれた「北条瀬木両村入合図」には、北条村の2ヶ所に瓶竈（かめがま）がみられる（図2）⁽⁶⁾。一つは瀬木山御番所

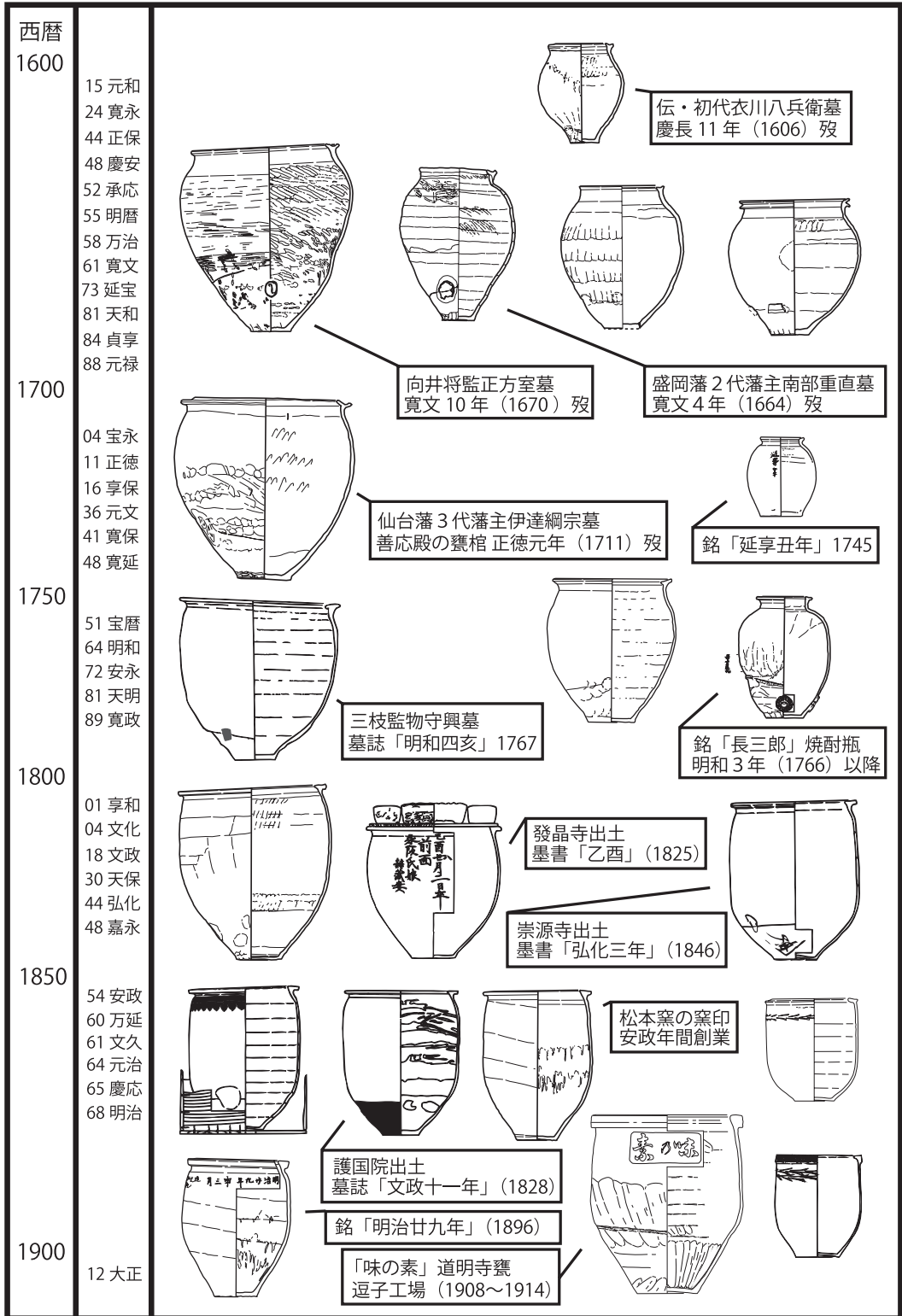


図1 近世常滑窯真焼甕類編年表(S=1/30)

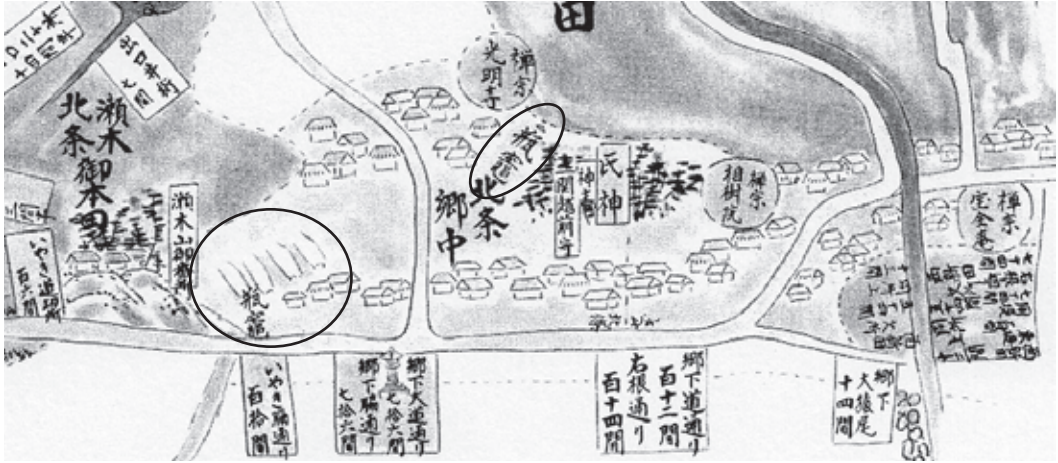


図2 北条瀬木村両村入合図

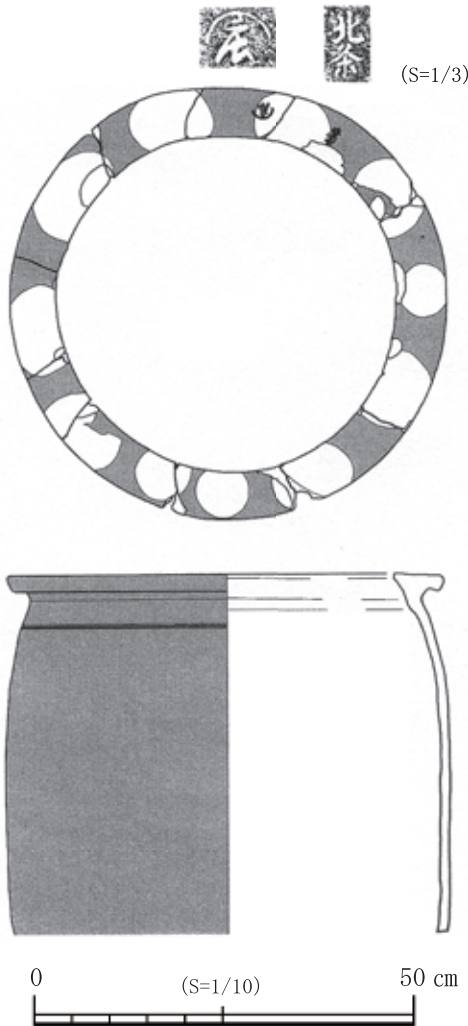


図3 全勝寺遺跡出土の真焼甕類

の南に4基の窯が描かれ、その南の氏神の北東に△の記号と瓶甕の書き込みがある。瀬木村や同時期に書かれた常滑村絵図では、窯の表現がみられず、近世常滑窯における北条村の優位性が理解されよう。また、肥田家文書には「北条焼」と積荷を表しているものが存在している。それを裏付けるように、「北条」、「○に庄」の印刻が施された真焼の甕が東京都新宿区全勝寺遺跡から出土している(図3)⁽⁷⁾。

近世常滑窯の窯構造は「鉄砲窯」と呼ばれる大窯が主流である。この大窯は『張州雑志』「甕甕之図」に描かれており、当該期の瀬戸窯や美濃窯とは異なり、窖窯の天井を地上に出した構造となっているが、それ以外は不明な点が多い。この図には3基の窯が描かれており、2基は焼成中で、1基は窯出しの様子が描かれている(図4)。窯の天井高は人の背丈の2倍近くもあるため、多少の誇張も想定されるが、人が屈まず入ることが可能であったとみられる。同じ『張州雑志』「常滑村之図」には北条村とともに(図5)、奥条村でも煙が立ち昇る窯が描かれている⁽⁸⁾。近世の大窯は改良を加えられながら近代にも存続している。1912年(明治45年)に刊行された『常滑陶器誌』には近代の大窯の写真があり(傳中窯か?)、天井高は2m近いと推測される(写真1、2)⁽⁹⁾。

近世常滑窯の大窯は単房で、焚口が1ヶ所の大窯であったため焼成室内の温度を均一にする



図4 『張州雜志』「甕竈之図」

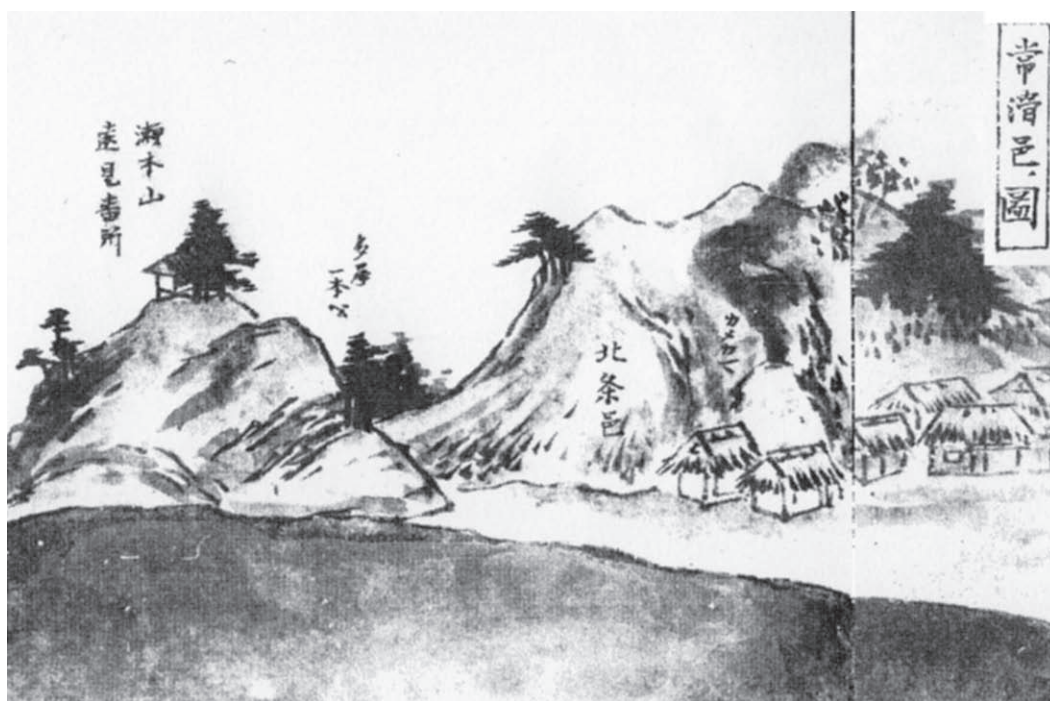


図5 『張州雜志』「常滑邑之図」

ことは困難である。焚口付近に窯詰めしたものは必然的によく焼けた真焼物（まやけもの）、多くは温度が低く素焼き状の赤物（あかももの）となる。こうした状況を打開するために、瀬木村の鯉江小三郎・伊三郎父子が1834年（天保5年）頃に連房式登窯を導入したといわれている⁽¹⁰⁾。江戸で出

土する常滑窯製品は真焼物と小細工物で、真焼物は甕類、小細工物は急須や徳利等である。瀧田家文書の「細工物覚帳」によると、1858年（安政5年）の急須・土瓶の出荷状況は12月の分だけで1148個もあり、まとまった量の小細工物が出荷されている。つまり、連房式登窯の導入を背景とした焼



写真1 近代の大窯の窯入れ(『常滑陶器誌』)

成技術の向上によって、連房式登窯では真焼物と小細工物が焼成され、大窯では赤物と少量の真焼物が生産されるようになり、真焼物が安定して供給できる生産体制が確立したといえる⁽¹¹⁾。

真焼物の甕類は1861年(文久元年)の三木屋武兵衛や1865年(慶応元年)の志満屋清右衛門が瀧田儀三郎に宛てた注文書を見ると、道明寺瓶(どうみょうじがめ)、酢瓶(すがめ)、壺(つぼ)、半戸(はんどう)、夏半戸(なつはんどう)など様々な名称が確認できる。特に、「道明寺瓶」は高額でありながらも大量に出荷されており、「近世常滑焼」を代表する江戸向けの高級品であったと考えられる。しかし、上記の真焼甕類の名称がどの形状の甕や壺に該当するのかは判然としないといった根本的な課題も残されている。

こうした状況から、19世紀の近世常滑窯は連房式登窯導入によって、生産体制の変化だけでなく、販路拡大に伴う経済流通の変化も評価されるところである。その反面、考古学的研究によって文献学に基づく成果を再検証する必要性も生じている。

2 江戸遺跡出土の真焼甕類の形態

近世常滑窯の真焼甕類は貯蔵具として様々な用途を持っていたことは想像に難くないが、消費地遺跡である江戸遺跡の調査で、それを示す成果は非常に少ない⁽¹²⁾。1970年代以降、江戸遺跡の調査事例が増加し、真焼甕類を棺として用いた事例が明らかとなってきた。『古事類苑』『和漢集合葬

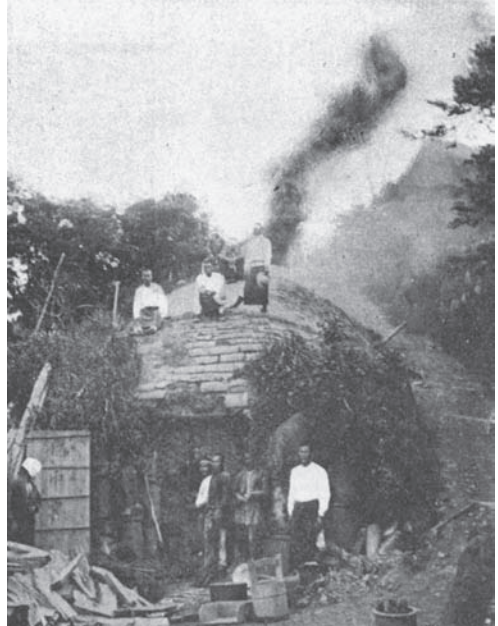


写真2 近代の大窯の焼成の様子

祭紀略」には、「棺ハ厚板ヲ以テ臥棺ニ製シ、瀝青ヲ注ギ、灰隔等ヲ作ルベキ事ナレドモ、微力ニテハ辦ジ難ケレバ、是マデハ甕ヲノミヒタリ」や、「甕モ葉掛ケノ品ニテ、石ノ蓋ヲ用フベキ事ナレドモ、ソレサヘ出来難キ家ニテハ、素焼ノ甕ニ、松カ檜ノ厚板ニテ蓋ヲ作り」という記述があり、甕類が棺として普及していたことが理解される。その中で身分と歿年が判明しているものは、盛岡藩2代藩主南部重直(歿年1664)⁽¹³⁾、横須賀軍艦奉行向井将監正方妻室(歿年1670)、⁽¹⁴⁾仙台藩3代藩主伊達綱宗(歿年1711)、越後長岡藩10代藩主牧野忠雅(歿年1858)などがある。また、墓地跡で出土した真焼甕類の石蓋に刻まれた墓誌⁽¹⁵⁾、甕や蓋に書かれた墨書によって、武家層を中心に甕棺が用いられたことが明らかとなった。

出土した真焼甕類や伝世資料は、口縁部や胴部形態を含めた諸特徴から、17世紀から20世紀までの真焼甕類の編年表を図1に提示した。本章では、19世紀初頭から幕末期の真焼甕類の特徴について概観する(図6)。

当該期の真焼甕類の口縁は外端部が水平に突出し、内端部もわずかに突出する。外端部は総じて



写真3 甕類の口縁部にみられる目跡



写真4 甕類の胴部下半にみられる素焼き部分

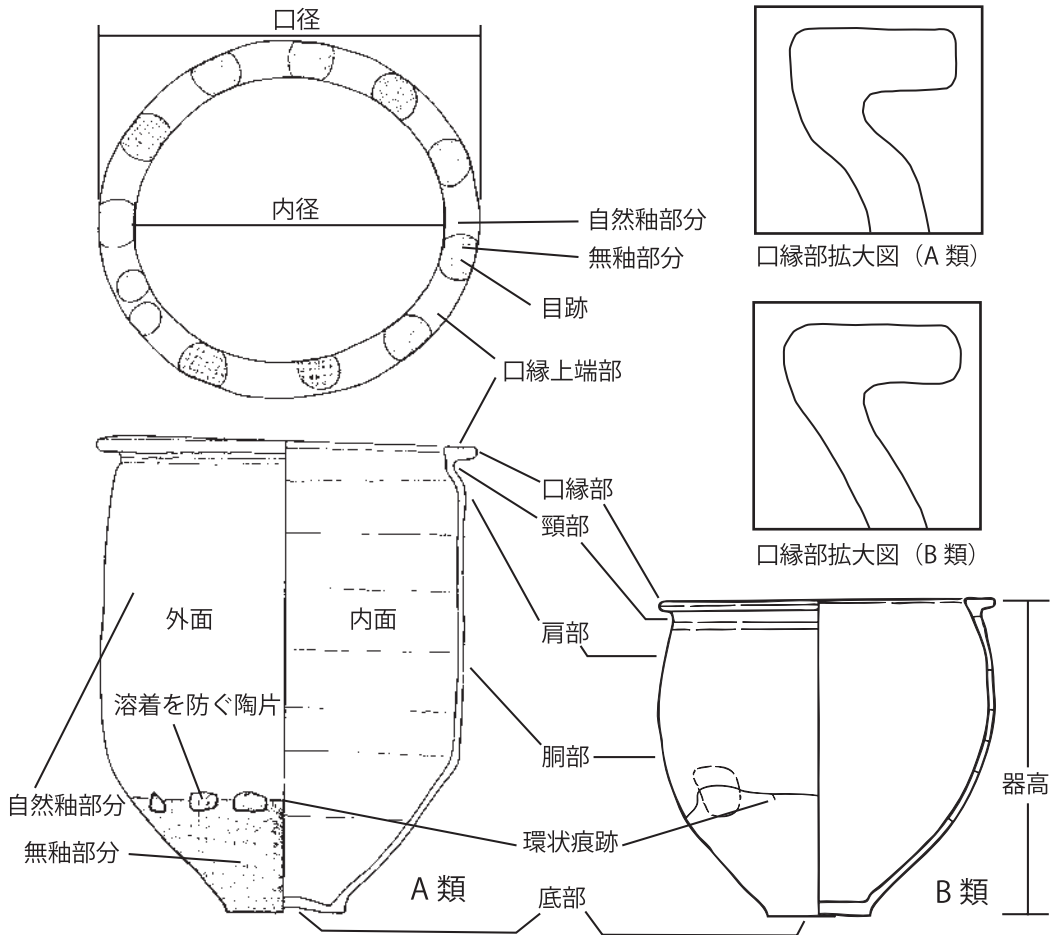


図6 19世紀初頭から幕末の真焼甕類

やや角張っているが、丸みを持つものも認められる。突出部の厚さは1.5～2cm程度を測る。頸部は指2本前後の溝が認められる。口縁部の上端には「目跡」(めあと)が出現する(写真3)⁽¹⁶⁾。「目跡」は焼成で生じる自然釉の溶着を防ぐ方法として、口縁部上端に円形や方形の人工物、陶片を置くことで生じる無釉部分の痕跡と考えられている。しかし、急須や徳利などの小細工物を口縁上端部に配置して焼成したための痕跡とする見方や、装飾として意図的に無釉部分を残した可能性もある。焼成で生じる痕跡として、甕を積み重ねて焼いたために胴部下半に環状の痕跡や溶着を防ぐ陶片が張り付いたものもみられる。環状痕跡より下部は素焼き状となり明赤褐色の焼むら部分となっている(写真4)⁽¹⁷⁾。外面は無釉だが、内面には白釉風の釉薬がみられるものもある。肩部から胴部にかけて直線的に下降するものと丸みを持ってすばまる形態がある。型式学的には前者が新しい要素であるものの、同時期に製作されていた可能性が高い。底部は甕のサイズにもよるが、概ね20～30cm前後の円形を呈する。本論では胴部が直線状のものをA類、弧状のものをB類に分類する。

3 真焼甕類の検討

さて、前章で概観した19世紀初頭から幕末の真焼甕類の特徴をもとにして、江戸遺跡で出土した真焼甕類の内、口縁から底部まで回転復元が可能な資料であったA類74点とB類81点の合計155点を抽出した。これらの実測図から口径、胴部、容量を計測した。容量は円の面積(πr^2)を計算し、底部から頸部と肩部の接続部までを1cm毎に輪切りにした円柱の体積($\pi r^2 \times h$)を合算し、当該期の容量の単位である斗(1斗 \approx 18ℓ)に換算した。そのため、実際の容量とは若干の誤差も想定されるが、今回の検討においては一つの指標に成り得ると考えられる。

(i) 真焼甕類の容量と胴部形態

図7は真焼甕類の容量と胴部形態からみた出土点数の推移である。最も点数が多いのは6.5斗の22点で、5～8斗の真焼甕類は出土総数の6割

を占めている。また、1.5斗前後にも集中域が認められる。A類は7斗付近が最も多く出土しているのに対して、B類はA類より0.5～1斗程度少ない規格が多く選択されている。また、1.5斗付近にB類が出土し、8斗以上のものにも認められる点に注目できる。

このことから、成人用の甕棺墓に適した容量は5～8斗にあり、小児用は1.5斗前後、特別階級層や合葬、改葬といった特殊な事例の場合には8斗以上の大きな真焼甕類が用いられたと考えられる。男性がA類に用いられるといった性別差と甕の形態との関連性を見出すことはできないようである。甕棺墓からみた真焼甕類の基準として、①小型は5斗未満、②中型は5斗以上8斗未満、③大型は8斗以上と解釈することが可能である。

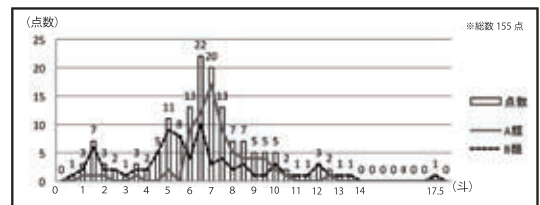


図7 真焼甕類の胴部形態からみた容量と出土点数の推移

(ii) 真焼甕類の口径と容量の推移

図8は真焼甕類を口径(外径)別にみた出土点数の推移である。全体でみると①口径35cm以上40cm未満に小児用甕棺の集中域があり、②50cm以上70cm未満に成人用甕棺の大きな集中域が認められる。前者は10点中8点がB類で高い占有率となり、容量の平均は2斗前後である。後者はB類が50cm以上70cm未満まで一定量存在しているが、A類が55cm以上65cm未満に59点とA類の8割が集中している。口径と容量の関係は、A類は50cm以上55cm未満で平均6斗、55cm以上60cm未満で平均7斗、60cm以上65cm未満で平均8斗、65cm以上70cm未満で平均9斗なる。一方、B類は50cm以上55cm未満で平均5斗、55cm以上60cm未満で平均7斗、60cm以上65cm未満で平均7.5斗、65cm以上70cm未満で平均9斗となる。つまり、A類は50cmから70cmにかけて、口径が5cm刻みで容量が1斗ずつ増加することが理

解される。しかし、B類にはその兆候がみられず、65cm以上になると容量が大幅に増加することが理解される。

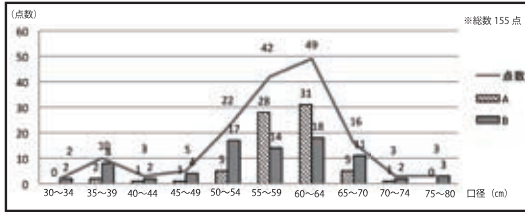


図8 真焼甕類の口径(外径)と出土点数の推移

(iii) 真焼甕類の口径と器高について

図9は口径と器高に着目したA・B類の相関図である。全体でみると口径は30～80cm、器高は30～90cmの範囲に集約される。集中域は①口径35～45cm、器高40～50cm、②口径50～70cm、器高55cm～75cm、③口径60～80cm、器高80～90cmの3つの分布が認められる。この分布域をそのまま小型、中型、大型に分離できるわけではないが、図8で提示した結果を考慮に入れると、口径50cm、器高55cmが小児用甕棺と成人用甕棺として選択される分岐点であったと考えられる。また、①と③の分布域はB類が密となるが、②はA類が器高=口径+10cmのものが多く、B類はそれに器高と口径がほぼ近似するものがまわって存在している。

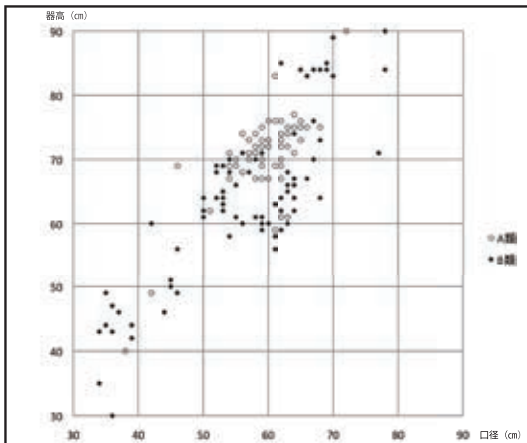


図9 真焼甕類の口径と器高の関係

(iv) 真焼甕類の目跡と胴部形態

出土した甕棺の中で、口縁上端部に「目跡」を持つものは155点中25点と全体の16%となる。そのなかでも特に注目されるのは、A類で74点中24点、B類で81点中4点と胴部形態によって差異が認められる点にある。図10のA類の真焼甕類の分布図をみると、「目跡」を持つものはA類全体の3割を占め、口径55～65cm、器高65～75cm、容量7斗前後の成人用甕棺に集中する傾向がみられる。図11の目跡を持つ真焼甕類の分布をみると、B類は点数が少ないものの、9斗以上の大型の真焼甕類に認められる点でA類と異なる。

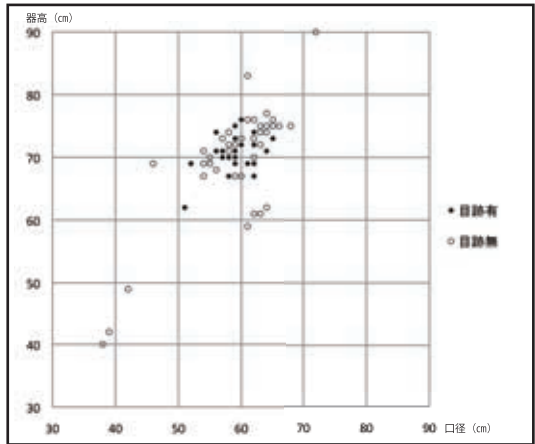


図10 A類の真焼甕類の分布

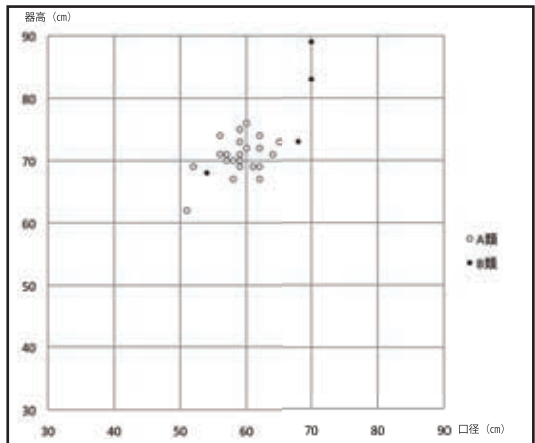


図11 形態別にみた目跡を持つ真焼甕類の分布

「目跡」の数は平均して10個程度であるが、最も少ないもので4個、多いもので21個も認められる。こうした「目跡」の数のバラつきは、「目跡」の痕跡が重ね焼きをした甕を効率的に遊離させるために残された痕跡として論を展開するには慎重にならざるを得ない。「目跡」については別稿を用意したい。

4 真焼甕類の名称について

前章の検討結果を踏まえつつ、瀧田家文書を中心に真焼甕類の名称の問題を取り上げる。

高部淑子氏が報告した瀧田金左衛門家は18世紀初頭から北条村に居宅を構えた家で、幕末期から明治10年代半ばにかけて、最大4艘の廻船を持っていた廻船主である。その瀧田家文書は常滑焼の流通に関わる文書が主で、「常滑と江戸」、「常滑と環伊勢湾地域」における流通を記す重要な史料である。瀧田家が常滑焼の取引をおこなった江戸の瀬戸物問屋は13軒程度あり、常滑焼の製品名と単価、数量、そして代金が記されている。

幕末期の瀧田家文書に記載のある真焼甕類は、道明寺瓶（どうみょうじがめ）、酢瓶（すがめ）、坪（壺）、焼酎瓶、半戸または半胴（はんどう）などがある。これらは用途や大きさを意味するものや、口径を基準とした尺刻みの名称が付けられている。

「近世常滑焼」の生産品の名称で最も注目されるのは「味の素」の生産で使用された道明寺甕（瓶）である。「味の素」は1908年（明治41年）に神奈川県逗子工場で生産が開始され、その際に道明寺甕が使用されている⁽¹⁸⁾。詳細は省くが、原料の小麦粉をタンパク質と澱粉に分離し、そのタンパク質に濃塩酸を加えて加水分解する粗製工程やグルタミン酸塩酸塩を濾過し、苛性ソーダを加える中製工程の際に道明寺甕が利用された。当時、様々な容器を使用した結果、大型の甕で安価、他の容器よりも長期利用も可能であったことから採用されたといわれている。この道明寺甕は逗子工場操業時から逗子工場が閉鎖される1915年（大正4年）まで主要な生産設備として用いられており、写真から工場内の土中に胴部下半を埋め込ん



写真5 道明寺甕の使用状況（大正時代）

で使用していたことが理解できる（写真5）。

大正時代に使用された道明寺甕は味の素(株)食とくらしの小さな博物館で展示されている。展示されている道明寺甕は口径72.5cm、器高85cm、底径28cm、重量65kg、容量は11.5斗を測る（図12）。口縁外端部の突出部は短く、厚みは6cmを有する。器形の外面には釉薬が塗布され、石膏型を用いて「味乃素」の装飾が施されている。胴部

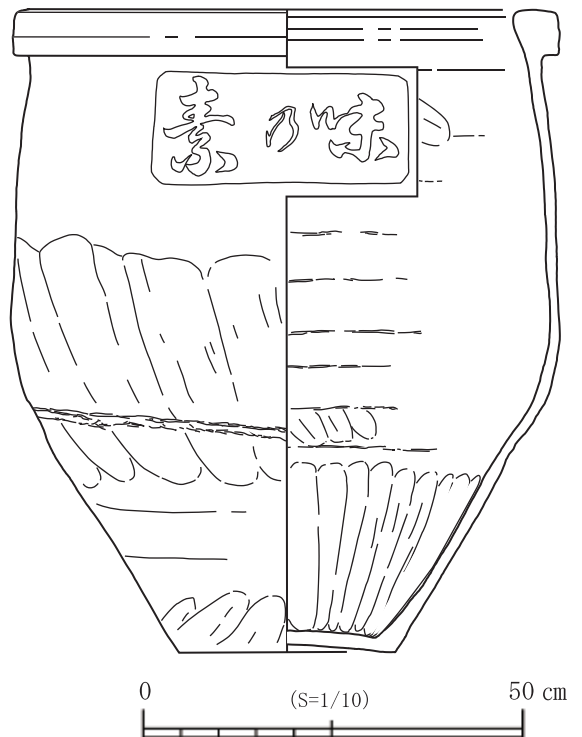


図12 味の素で使用された道明寺甕（大正時代）

形態は肩部から胴部下半まで直線的に下降する形態である。前章の検討結果を踏まえると、型式学的に、A類の系統につながる大型の真焼甕類である可能性が高い。つまり、19世紀初頭から幕末にかけて江戸へ供給されたA類の甕類が瀧田家文書にみられる「道明寺瓶」であったと考えられる。

酢瓶は道明寺瓶と同様に江戸へ大量に供給された器種の一つである。値段は道明寺瓶の半額程度で取引されており、瀧田家文書によると小道明寺瓶よりも小型であったと想定される。一方、長三郎の銘がある焼酎瓶は頸部までの容量が約2.7斗である(図13)。可能性の一つとして、酢と酒では異なるが、小児用甕棺として利用された3斗以下の真焼甕類が酢瓶として推測される。

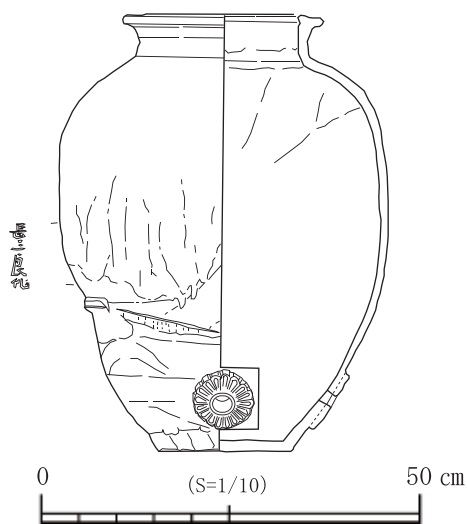


図13 「長三郎」の銘をもつ焼酎瓶

半胴瓶は1699年(元禄12年)の「瓶竈売立値段段并始終入用目録」が初見で、小型の寸胴形を呈する甕の一種として認識される。瀧田家文書にみられる半胴瓶は、「半胴」、「半銅」、「半戸」、「半ト」、「半」という名称が用いられており、瀬戸の赤津では「飯胴」とも呼ばれている。1861年(文久元年)に三木屋武兵衛が瀧田儀三郎に宛てた注文書には、「真焼半戸」、「上相半戸」、「上相半戸次物」、「上夏半戸」、「小ぶり上尺二半戸」、「上尺半戸」、「大釜小半戸」の7種類があり、値段から想定される

規格は「半戸→相半戸→夏半戸→尺二半戸→尺半戸」の大小順が推測できる。1873年(明治6年)に西浦五郎兵衛が周丸(瀧田)米吉に宛てた注文書には、「坪半ト」、「夏半ト」、「セキ印付小半ト」、「尺二」、「小半ト大ヒリ」、「尺二ビリ」の6種類があり、値段から想定される規格は「坪半ト→夏半ト→小半戸→尺二」と想定される。また、史料としては新しいが1889年(明治22年)の値段表には「相半胴」35銭、「壺半胴」25銭、「夏半胴」25銭、「小夏半胴」15銭、「尺二半胴」10銭、「尺一半胴」7銭5厘、「尺半胴」5銭5厘の記載がある。

以上の史料から、半胴瓶を規格順に列記すると、「間(相)→壺(坪)→夏→小(小夏?)→尺二→尺一→尺」となる。つまり、大型～中型は「間・壺・夏半胴」と呼ばれ、夏半胴より小型であれば、「尺二半胴」といった径を用いた名称が成立する。しかし、中型と小型の境界は不明瞭であり、今後の検討課題でもある。

近世常滑焼の半胴瓶の形状は口縁部内端が水平または、やや上方へ突出し、外端はわずかに突出する逆L字状を呈する(図14)。端部はやや角張ったものと丸みを持つものがあり、丸みのあるものは口縁内端の突出部が厚みを増し、口縁部と胴部の接続部分の内面が丸みを持っていることから新しい要素と考えられる。頸部や肩部はみられず、口縁部から胴部にかけて直線的に下降し、底部から胴部かけて直線的に下降し、底部から高さ10cm付近で径が狭くなる。また、口縁と胴部の接続部分から10cm下付近にヘラで横走る籐状装飾が施される⁽¹⁹⁾。江戸遺跡で墓地跡では出土数は少ないが、口縁の内径が30～37cm(約1尺1～2寸)の範囲のものが多い。文書からは小型から大型まで江戸市場へ幅広く供給されていたと考えられるが、中型から大型の甕棺として利用された事例は非常に少ない。おそらく甕棺として利用される6～8斗の一般的な真焼甕類は道明寺瓶であったため、尺二半胴は5斗以下の小児用甕棺を補完する関係にあったと想定される。

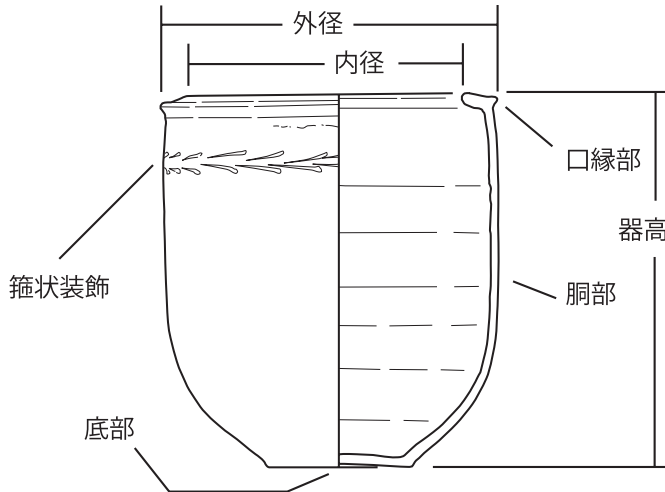


図14 半胴瓶の模式図



写真6 半胴瓶の口縁部

おわりに

本論では、19世紀初頭から幕末にかけての真焼甕類に注目しながら、「近世常滑焼」における文献学の成果を考古学的視点で検証してきた。「近世常滑焼」は文献史料を中心に研究が進められてきたが、それを検証する上で消費地遺跡から大量に出土する真焼甕類をどう評価するかが課題であるといえる。今回の研究視点であれば、「近世常滑焼」の甕類全体を分析することも可能である。また、これまで議論されてこなかった近代常滑焼も視野に入れて検証することが可能となる。本論を叩き台として、「近世常滑焼」研究を進めていきたい。

謝辞

研究会の発表、本論の執筆にあたって、愛知学院大学藤澤良祐先生、愛知学院大学講師（当時とこなめ陶の森資料館）中野晴久氏、上田市博物館尾見智志氏、多治見市美濃焼ミュージアム山本智子氏、福井県教育庁埋蔵文化財センター中島啓太氏、豊橋市文化財センター小山美紀氏、田原市役所文化生涯学習課阿部千絵氏にご指導、ご助言を頂いた。資料の実測には味の素株式会社牛島康明氏にご協力頂いた。また、日本福祉大学知多半島総合研究所の福岡猛志所長、曲田浩和先生には研究発表だけでなく、本号の執筆の機会も頂戴した。末尾ながら感謝するとともに、お礼申し上げます。

注一覧

- (1) 樋口好古（1822）『尾張徇行記』
- (2) 発掘調査の事例はないが、常滑市栄町の神明社の斜面に17世紀第4四半期の断面「F」字状のいわゆる二段口縁の甕が焼成された窯の灰原が残存している。すでに窯体部分は滅失している可能性が高いが、灰原の一部は良好に残っており、今後検討を行いたい。
- (3) 中野晴久（1986）「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館 研究紀要Ⅱ』
- (4) 高部淑子（2013）「近世常滑焼の生産と流通」『第26回 日本福祉大学知多半島総合研究所 歴史・民俗部研究集会 シンポジウム資料』
- (5) 尾張藩屋敷では白泥の藻がけ急須が出土しており、上行寺跡では甕を転用した水琴窟などが検出されている。
- (6) 松井竹敏・鈴木俊道他（1979）『常滑市誌 絵図・地図編』常滑市
- (7) 惟村忠志（2012）『全勝寺遺跡Ⅱ－新宿区舟町12－1内の開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- (8) 内藤東甫（1789）『張州雜志』
- (9) 瀧田貞一（1912）『常滑陶器誌』常滑町青年會
- (10) 常滑町史編纂會（1921）『鯉江方壽翁』常

- 滑市、吉田 弘『常滑焼の開拓者 鯉江方寿の生涯』
- (11) 中野晴久 (1996) 「常滑窯の研究～近世赤物について～」『知多古文化研究会 10 杉崎章先生追悼論文集』知多古文化研究会
- (12) 近世常滑窯製品が江戸遺跡からの出土量が僅少である背景は、資料そのものが、明治以降も長期に利用されたために出土しない可能性が高い。本論で取り上げた真焼甕類は甕棺として消費されたために今日まで現存したのであろう。
- (13) 似内啓邦・佐々木真史他 (1998) 『聖寿禪寺－南部重直墓所－発掘調査報告書』盛岡市教育委員会
- (14) 中三川昇 (2005) 『向井将監正方夫妻墓調査報告』横須賀市教育委員会
- (15) 財団法人新宿区生涯学習財団 (2004) 『新宿区埋蔵文化財緊急調査報告集Ⅰ－中落合二丁目遺跡・納戸町遺跡、蓮光寺跡・宝龍寺跡・牛込城跡Ⅲ・四谷三丁目遺跡Ⅱ・四谷三丁目遺跡Ⅲ・三栄町遺跡Ⅸ・百人町三丁目西遺跡Ⅶ・嶋田左内墓所－』
- (16) とこなめ陶の森資料館寄託資料
- (17) とこなめ陶の森資料館寄託資料
- (18) 味の素株式会社 (2009) 『味の素グループ百年－新価値創造と開拓者精神』味の素株式会社
- (19) 籠状の装飾は半胴瓶と井戸筒 (いどつ) にも施されることが多い。井戸筒は井戸側等とも呼ばれるもので、『張州雑誌』「甕竈之図」にも描かれている。
- 神楽坂5丁目プロジェクト計画用地に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－財団法人新宿区生涯学習財団
- ・小栗康寛 (2014) 「近世常滑窯の真焼甕類「半胴瓶」について－江戸遺跡出土資料を中心に－」『伊勢灣考古 23 号』知多古文化研究会
 - ・荻野早苗・宇佐美哲也 (2004) 『新宿区埋蔵文化財緊急調査報告集Ⅰ』財団法人新宿区生涯学習財団
 - ・惟村忠志 (1997) 「近世常滑大甕の編年と窯業画期素描」『牟邪志』第8号 牟邪志刊行会
 - ・惟村忠志 (2004) 「東叡山寛永寺護国院墓地跡の調査と成果」『墓と埋葬と江戸時代』江戸遺跡研究会編 吉川弘文館
 - ・惟村忠志 (2005) 『東京都新宿区崇源寺・正見寺跡－南元町複合施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
 - ・惟村忠志 (2007) 『東京都新宿区 法正寺遺跡－(仮) アビテ神楽坂Ⅱ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
 - ・惟村忠志 (2008) 『西方寺跡Ⅱ－(仮) 株式会社ユニカ新宿ビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』大成エンジニアリング株式会社
 - ・杉江理代 (2000) 「明治初期の北条地区における常滑焼の生産について」『常滑市民俗資料館研究紀要Ⅸ』
 - ・杉崎 章・中沢三千夫 (1974) 『常滑窯業誌』常滑市誌編さん委員会編
 - ・高部淑子 (2012) 「幕末・明治初年における常滑焼の生産について」『知多半島の歴史と現在 16』日本福祉大学知多半島総合研究所
 - ・高山 優 (2006) 『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘調査報告書』東京都港区教育委員会
 - ・滝口 宏 (1992) 『東京都新宿区 修行寺－(仮称) 富久町マンション新築工事に伴う緊急発掘調査報告書－』
 - ・滝口 宏・谷川章雄 (1993) 『圓應寺跡－新宿区立若葉高齢者在宅サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書－』新宿区厚生部遺跡調査会
 - ・谷川章雄 (1990) 『東叡山寛永寺護国院Ⅰ 都

参考文献

- ・青木 誠 (2008) 『東京都新宿区法光寺跡Ⅲ－(仮称) 坂町共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』岡三リビング株式会社
- ・安藤 裕 (1972) 『郷土の工芸 上田のやきもの 染屋焼・下郷焼・東馬焼』上田市立博物館
- ・扇浦正義 (1987) 「第2節 常滑大甕の編年的考察」『自證院遺跡－新宿区立富久小学校改築工事に伴う緊急発掘調査報告書－』東京都新宿区教育委員会
- ・大八木謙司 (2003) 『行元寺跡－(仮称) 藤和

- 立上野高等学校内埋蔵文化財発掘調査報告書』
都立学校遺跡調査会
- ・ 谷川章雄（1994）『矢来町遺跡－区立矢来町区民住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書－』新宿区遺跡調査会
 - ・ 谷川章雄・羽木 真（1999）『法光寺跡Ⅱ－東京都下水道局による荒木町付近再構築工事に伴う緊急発掘調査報告書－』新宿区法光寺跡遺跡調査団
 - ・ 玉木博史（2007）『南町遺跡VI－ルネ神楽坂建設事業に伴う緊急発掘調査報告書－』岡三リビング株式会社
 - ・ 中沢三千夫（1967）『常滑陶業史』愛知県立常滑高等学校
 - ・ 中野隆久（2007）『全勝寺遺跡－（仮称）新宿区舟町計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』共和開発株式会社
 - ・ 中野晴久（2004）『とうかい歴史の小径 嚶鳴館講座・第11回 江戸から昭和の常滑焼』東海市立平洲記念館
 - ・ 中野晴久（2006）「生産③「常滑窯」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集 財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター
 - ・ 中野晴久（2012）「第1章総論9 近世常滑窯」『愛知県史 別編 中世・近世 常滑系 窯業 3』愛知県
 - ・ 西木浩一（2013）「都市江戸の墓地問題」『浅草寺仏教文化講座 平成二十四年度 第57集』浅草寺
 - ・ 東野豊秋（2005）『若宮町遺跡Ⅳ－市谷逢坂テラス新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』東京都新宿区教育委員会
 - ・ 似内啓邦（2010）「聖壽禪寺盛岡藩南部家墓所」『考古学ジャーナル』No. 595
 - ・ 山川一年（1993）『瀬戸市史 陶磁史編五』瀬戸市史編纂委員会
 - ・ 渡辺久生（2008）『東円寺墓所跡－（仮）新宿区市谷薬王寺町 PROJECT に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』株式会社 浅沼組東京本店